

IV 成果と課題

1 研究の成果

- 1 単元や発達段階の特性を踏まえて言語活動を工夫することにより、児童は、自分の思いや考えをもち、それを伝え合うための知識・技能を身に付けるであろう。

言語活動の工夫として、授業構成を一定にすることで、子ども達が見通しをもって活動に参加できるよう授業を進めてきた。これまでの取り組みから、授業の流れが子ども達に定着してきており、自分の思いや考えを相手に伝えようとする気持ちを高めながら、新しい単語や表現の習得を積極的に行おうとする児童の姿を、どの学年の授業でも見る事ができた。

第1・2学年の実践「Welcome to Animal Land.～いっしょにあそぼう～」では、1・2年生がそれぞれのためあてをもちながら、一緒に活動を行った。Activityでは、2年生が英語で動物の3つのヒントを1年生に出し、1年生がそれに答える活動を楽しんだ。1年生が3つのヒントだけでは分からず困っていると、2年生は4つ目のヒントをその場で考えたり、動物の様子を言葉だけでなくジェスチャーで表現したりしながら、一生懸命自分の思いを伝えようとする姿が見られた。2年生はピア・サポート活動も含め、「誰に」「何のために」という相手意識や目的意識をはっきりともって言語活動に取り組むことができた。また、1年生は2年生とのやり取りを通して、コミュニケーションの楽しさを味わうことができた。



ジェスチャーで思いを伝えようとする児童（1・2年生）

第3学年の実践「ALPHABET～アルファベットさがし大会をしよう～」、第4学年の実践「What do you want?～Happyになれる“にこにこ弁当”をどうぞ～」の実践では、どちらの実践でも単元のゴールを明確に設定し、そのために必要な語句や文を、単元を通して習得できるよう、繰り返し練習することを大切にされた。毎時のWarm upでは、SongやSmall Talkの活動の中に、単元のゴールに必要な単語や文、アルファベットを取り入れ、楽しく繰り返し練習する中で、子ども達は確実に英語表現に馴染みをもつようになり、ゴールに向かって必要な言語を習得することができた。



相手に伝わるよう、考えを書き表す児童（6年生）

第5学年の実践「Can you do this?～自分のことを今年来られた先生方に紹介しよう～」、第6学年の実践「What sport do you like?～人気のスポーツを調べよう～」では、どちらも児童が本当に伝えたい内容を話したり、友達の話す内容を聞いたりすることができる場面設定を大切にされた実践ができた。場面設定に相手意識をもたせることで、聞き方や話し方、書き方を考え、「どの伝え方がよいか」「どうやったら伝わるか」と思考を巡らせ、児童の気付きを大切に工夫があった。

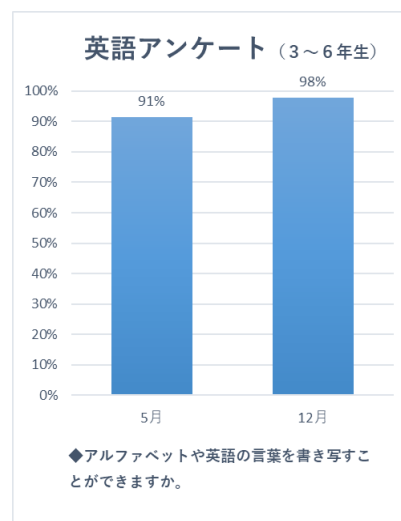
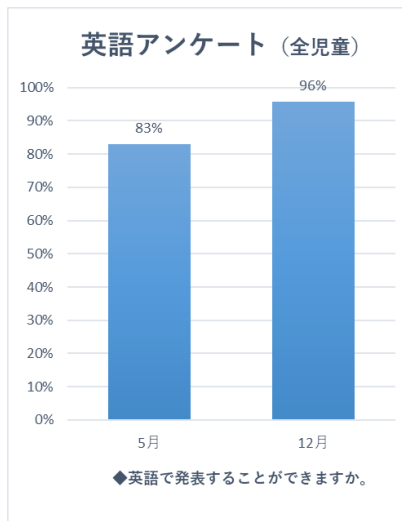
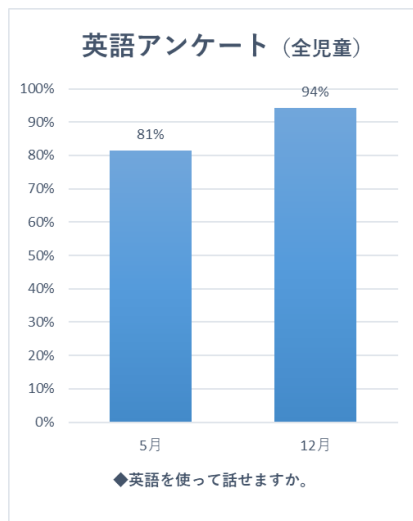
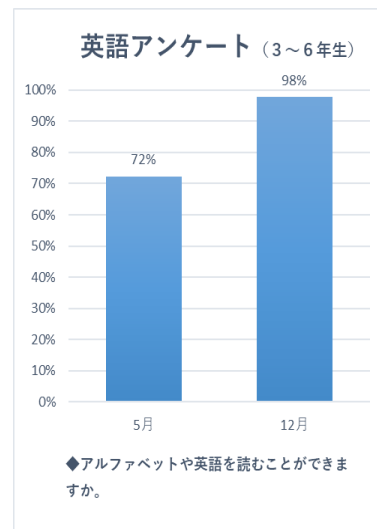
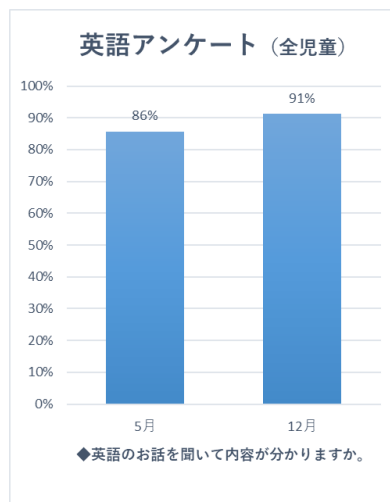
また、昨年度の課題として ICT の活用が挙げられていたことを受け、タブレット PC を使用しながら言語活動を工夫した授業の研究も行った。第3学年では、撮影した画像を使用し、アルファベットクイズを児童のタブレット PC に送りながらクイズ大会を行った。また、第6学年では、自分の調べたオリンピック選手についてデータでまとめ、説明の手がかりとして相手に見せながらやり取りを行った。有効な活用方法についてはまだ研究の余地が大いにあるが、やり取りにおいて、より相手意識をもって伝えようとしたり、コミュニケーションを円滑に行ったりするためのツールとして活用することができた。



作成した問題をタブレットから送信する児童（3年生）

図1のアンケート「英語の話を聞いて内容が分かりますか（聞くこと）」、「アルファベットや英語の言葉を読むことができますか（読むこと）」、「英語を使って話せますか（話すこと・やり取り）」、「英語で発表することができますか（話すこと・発表）」、「アルファベットや英語の言葉を書き写すことができますか（書くこと）」から、どの項目でも、年度当初より知識・技能に関する自信が向上していることが推察される。言語活動の様々な工夫が、向上に結びついた結果と考える。

図1 英語アンケートより



2 1 単位時間または単元の中で、児童自身による評価（振り返り）や教師による評価を適切に行うことによって、児童は思考力・判断力・表現力を高めながら学習に取り組むであろう。

どの学年においても、毎回の授業の時間で全てを見取るのではなく、単元のまとまりの中で学習内容と評価の場面を適切に組み立てていくことができるよう、単元を通した評価の計画を活用しながら授業実践を行った。この評価基準と評価の計画を活用することで、児童の学習状況を的確に捉え、指導の改善につなげることができるようにした。作成した評価規準を指導との一体化につなげる具体策として、評価規準に照らして十分でない状況が見られた場合に、その後どのような指導改善を行い、その結果どう児童が変容したか、継続的に学習の過程を見取るようにした。（各実践記録参照）

また、児童自身が身に付けたい英語の力を自覚し、自己調整しながら学びを深めることができるようにするため、ワークシートには単元のゴールに向けた達成状況を自己評価できる「がんばるリスト」を表記した。児童は、単元のスタート時から自分のゴール時の姿をイメージしながら、毎時間今の自分の力はどうか、次の時間はどんなことをがんばりたいか等、自分の言葉で振り返ることができた。この振り返りの作業では、上学年では毎時間「自分のめあて（My aim）」に対して考えを書くようにした。できるようになったことや新しく知ったことなどを記述させることで、自己の変容に気付いたり、自分の学びを自覚できたりする姿も見られた。

さらに、授業の終わりには、担任、ALT がそれぞれの観点で感じたことをフィードバックすることで次時につなげられるようにした。主に担任は単元全体を見直し、前時と比べた時の児童の成長を、ALT は発音や表現について感じたことを伝えた。担任やALT からしっかり褒められることで、次時に向けてさらに自己調整しようとする姿が見られた。

図2の英語アンケート「相手に思いを伝えるために工夫して伝えようとすることができましたか。」の項目では、全体の9割以上の児童が、自分の思いを伝えるために意識して工夫していたことが分かる。覚えたことを話すだけではなく、必然性のある場面状況の中で、主体性を意識した言語活動を行うことを通して、思考力・判断力・表現力を高めていくことができていると推察できる。授業の中で児童が、主体的に中間交流や、ふりかえりの活動を行った結果であるとも言えるであろう。

Lesson7 What do you want? オリジナル「相手に思いを伝える」を考えよう

Grade 4 Name Mebae

がんばるリスト

乗物や野菜の言い方が分り、使うことができた。
 相手に敬しい物を英語で贈ることができた。
 自分が欲しい物を相手に英語で伝える事ができた。
 友達と英語で2週間以上会話することができた。

Date /	Aim	How about today's lesson? -がんばった・初めて知った・前と比べて -楽しかった・実用は...
Date 11/27	ほしいものなすおたたり、たえたりしよう。	友達にたすおたたり、たえたりする。とができた。たえたりする時の言い方がわからなかった。
Date 11/28	ほしいものなすおたりにたすたりする言い方を覚える。	今日たすおたりのゲームをやった。たすおたりの言い方がわからなかった。たすおたりの言い方を覚えた。
Date 11/29	相手に敬しい物を英語で贈る事を工夫してオリジナルの物を贈ろう。	たすおたりの時にたすおたりのものを贈る。たすおたりのものを贈る。たすおたりのものを贈る。
Date 11/30	オリジナルの物にたすおたりのおかしな考えよう。	たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。
Date 12/1	たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えようを工夫してオリジナルの物を贈ろう。	たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。
Date 12/2	オリジナルの物にたすおたりのおかしな考えようを工夫してオリジナルの物を贈ろう。	たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。
Date 12/3	オリジナルの物にたすおたりのおかしな考えようを工夫してオリジナルの物を贈ろう。	たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。たすおたりの物にたすおたりのおかしな考えよう。

児童のがんばるリストとふりかえり（ワークシート）

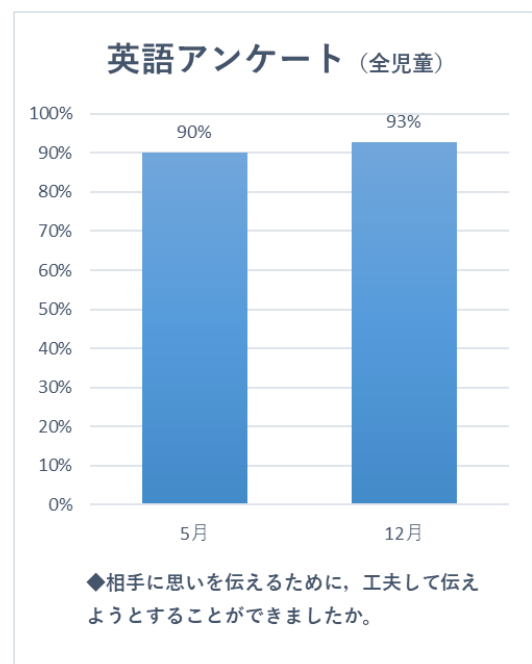


図2 英語アンケートより

- ③ 学びのつながりを意識して、様々な人々と関わる事ができる単元（新本オリジナル）を構成することで、英語によるコミュニケーションの楽しさを味わい、より広い世界に目を向けるであろう。

コロナ禍での実践で、先の見通しが立ちにくかったため、学校外の様々な人々と関わる単元構成はできなかったが、学びの広がりや人との関わりが生まれる単元構成が行えるよう、各学年とも工夫と対策を凝らして実践を行った。

第1・2学年では、クラスの友達や先生との関わりから異学年へと、関わりの対象を広げ、英語で会話をする楽しさを味わうことができた。ここでは、日頃のピア・サポート活動や生活科での体験活動との関連が意欲付けに効果的であったといえる。

第5学年では、新しく新本小学校にきた先生方に、自分のできることや義民オペレッタで使用する楽器を紹介するというゴールを設定した。音楽科や総合的な学習の時間と関連付けることで、児童が前向きに英語の楽しさを感じたり、やりとりの広がりから、他者へ配慮した思考を高めたりする工夫があった。



新しく来た先生に楽器を紹介する児童（5年生）

また、第6学年では、総合的な学習の時間にオリンピックについて学習したことから学びを広げ、新本小学校で人気のスポーツは何か調べて発表することを単元のゴールとした。国際理解教育、キャリア教育、道徳教育等、様々な要素を含みながら授業を展開し、児童は伝え合う喜びや達成感を味わいながら自分の世界を広げていくことができた。

図3のアンケートからは、どの領域においても、主体的に学習に取り組む態度が向上したことが伺える。特に、昨年度からの課題であった「読むこと」の項目である、「アルファベットや英語の言葉をもっと読みたいですか。」の質問では、約9割の児童が肯定的な回答をすることができた。書くことに必然性をもたせる単元構成の工夫や、第3学年からスモールステップでアルファベットに慣れ親しむ活動を積み重ねた結果が、継続して効果を発揮している

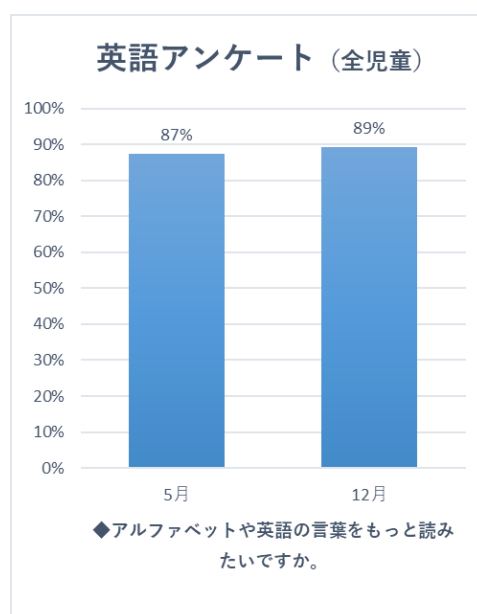
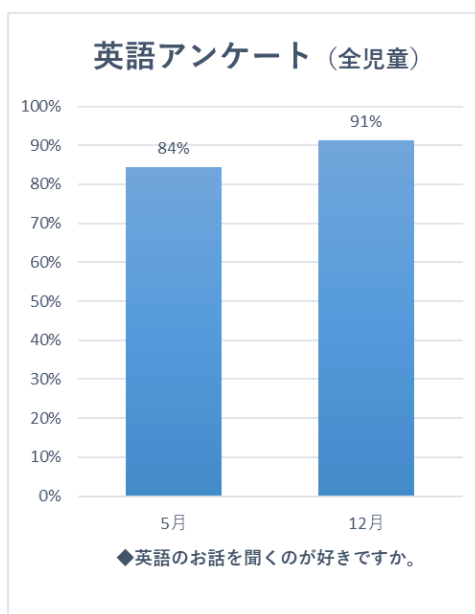
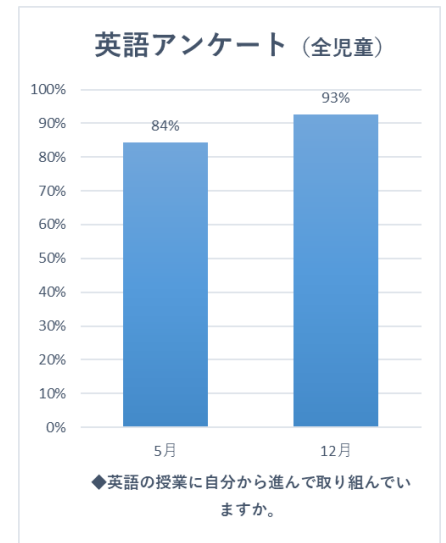
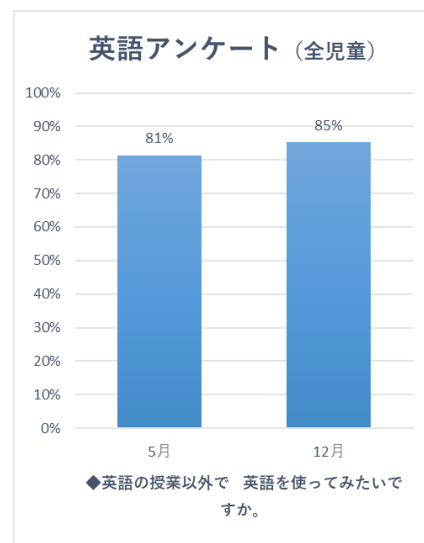
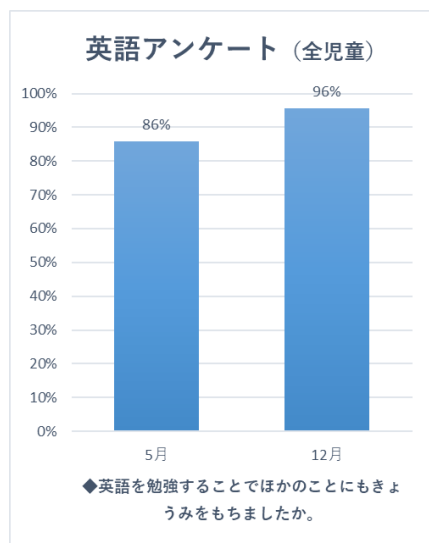
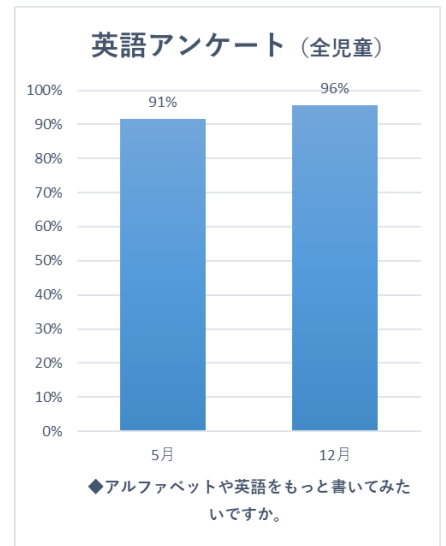
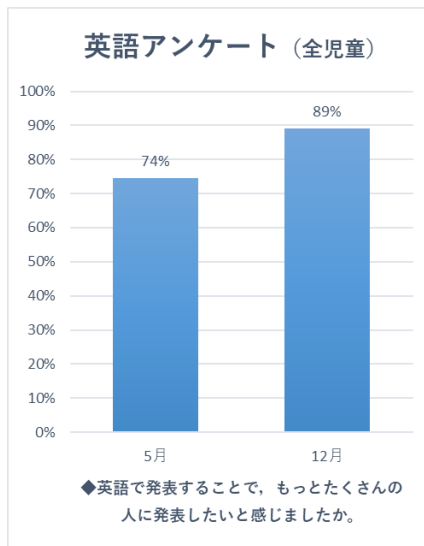
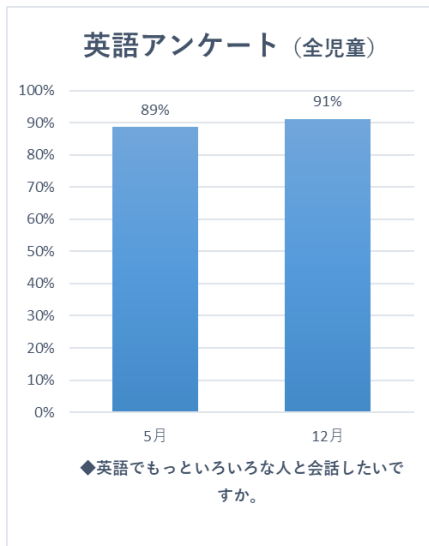


図3 英語アンケートより

と言えるであろう。



また、「英語で発表することで、もっとたくさんの人に発表したいと感じましたか。(話すこと・発表)」の質問では、年度当初より15%も肯定的回答が増えた。本項目は昨年度の同アンケートで、年度当初よりも年度末の方が肯定的回答が下回った項目である。肯定的回答が増えた要因として、必然性のある場面や状況の設定を大切にされた単元構成と、その単元のめあてを児童がしっかりと把握しながら授業に取り組めたことが挙げられると考える。

2 今後の課題

○ 指導と評価の一体化

「評価」だけを取り出して考えるのではなく、目標－指導－評価のPDCAサイクルを大切にしながら、授業の在り方を考えていく必要がある。今年度の実践を受け、評価基準と評価の計画を見直しながら、適切な評価場面で適切に評価する方法について研究を進める必要があると考える。1単位時間を指導者の計画通り進めるだけではなく、児童が評価基準に達していないと判断した場合に、どんな指導を行うべきなのか、単元をどのように修正すべきなのか、より指導者にとって指導改善に生きる、児童らにとって学習改善に生きる学習評価を進めていきたい。

また、「記録に残す評価」について、どこで記録に残す評価を行えば、それらが指導者にとって指導改善につながり、児童の学習改善につながるのか考え、評価場面の精選を行っていききたい。

○ カリキュラムマネジメント（単元開発）

アンケート結果から、「英語の授業以外で英語を使ってみたい」と回答した児童が、他の項目より少ないのが分かった。本項目は昨年度も同様に伸び悩んでおり、一昨年度に比べて、発表の場が限られたり、やり取りに制限があったりしたことが関係しているとも考えられる。できる範囲で、発表の場や、やり取りの対象を工夫し、英語を使う楽しさや達成感を味わえるように単元構成を行っていききたい。他教科や他の教育活動と関連させながら展開し、英語学習を生活に生かす「新本オリジナル」の学びを、引き続き創り出せるよう研究したい。

○ ICTの活用

情報教育の推進、GIGAスクール構想の実現に向け、ICT活用能力が求められている。「主体的・対話的で深い学び」の視点から外国語活動、外国語科においても、活用法の研究を単元構成と同時に行っていく必要がある。

昨年度からの課題としてICT活用が挙げられていたことを受け、今年度はタブレットPCを使用しながら言語活動を工夫した授業の研究も行った。しかし、児童の発信力を高めるために、英語学習の特性を生かした活用法を考える余地は大いにあるであろう。より充実した学習を展開するため、効果的な活用方法を追求したい。